

降誕節 感謝集会

大歓喜の福音

1981年12月20日(京都 銅駝会館)

奥田昌道

京都召団の歩み 天使の言葉 イエスの名 聖霊の来臨 マリヤとエリザベツ イエスの誕生
 と羊飼いの懼るな 大歓喜の音信 神の御業 シメオン 永遠の生命 この人を視よ 個を活
 かす光 永遠の真理 十字架と門

●京都召団の歩み

皆さん、本当に今日はクリスマスで嬉しい日ですから、心楽しく今日一日過ごしたいと思えます。堅苦しいクリスマス集会でなくて、楽しいリラックスしたクリスマス集会でありたいと思います。

森下さんが既に仰いましたけど、今年の一年というものを振り返って、本当に我々は恵まれ、護られ、力ある御手に導かれたという実感が強いです。今年一年になって、今年のお正月以降にここに加わられた方が随分たくさんいらっしゃいます。皆、私が招いたのでもないし、皆さんがもちろん自分で行くこうと思っただけで来られたのだけでも、それを促して後から押し出されて、召団の門をたたかれて、あるいは私の門をたたかれて、そしていっぺん来たらもうあとやみつきでね、誰も離れていないですよ。いろんな道を通して、ある時は家庭の問題、ある時は突然の病、ある時は精神的な行き詰まり、いろいろありました。いろんな事が一つのきっかけとなって、そこを関門として、その彼方に光輝くものがあったんですね。だから、我々がこの地上でいろんな試練にぶつかりますことは決して、それだけでは終わらない。その試練を越えて、苦しみを越えてその彼方にちゃんと光輝くものが待っているんです。私はそのことをつくづく思います。

それで、我々の集会も、前回は申しましたが、1972年の1月1日から家内と二人で私の家の二階座敷で始めました。それが今ではあそこで入りきれなくて、この銅駝会館という所をお借りしまして、ここでびったりですよ。実にありがたいことだと思います。こういう事態を見ましても、これは人がつくった集会じゃありません。キリストが真ん中に立って、そして一人ひとりをしつかり捕まえて、そしてぐんぐん引張っておられる。そういうキリストの気球に乗って天に昇っていくような、そういう集会ですね。

私自身も毎年のことながら、今年もまた大変忙しい一年でありました。集会のためにひたすら祈って準備をしてという、そんな年ではなかったんです。「えいつ、ままよ」というかな、本当に川の流れ、水の流れに委ねて、



「主さま、あなたが始められた集会ですから、あなたが責任をもって一人ひとりを力づけ、命づけ、そして形造つてくださるはずです。私はそのおもりをさしていただきます」

と、そういうつもりで私は日曜、日曜やってきました。その積み重ねです。それからもう一つ、山の上の祈り会が復活したんですね。今年は復活節の時に、参加した光栄を担っている者は誰ですかね。あの時は3人かな、そのくらいでしたよ。ところが、今朝なんて9人ですよ。四国から走って来た人が、というのはオーバーですけど、森下君が四国からやって来て、それで今日はそんなことで9人で山で祈った。山は雪が降っていた。雪が降ろうが槍が降ろうがやるということでしたから。そういうことだと思いますと、実に我々は恵まれています。それからまた、横浜から粟津さんがお見えになりました。奈良から弘野さん——ありがとうございます——名古屋から広瀬君がということ、実に我々はうれしい思いをしております。

それでは、ルカ伝のほうに入りましょう。あわせて、さきほども森下さんが言われたけれども、地方で一人でクリスマスを迎えている兄弟姉妹のことをいつも思っていたと思います。また、家庭集会をなさっている方々のことを覚えたいと思います。

●天使の言葉

ルカ伝の第1、2章には主がお生まれになるまでのことが書かれています。マリヤさんの主の讃歌をちよつと見ておきましょう。神さまのお告げがマリヤさんに臨みました。ルカ伝第1章26節。まず、あのエリサベツというバプテスマのヨハネのお母さんに聖霊が臨みました。それから6か月たちまして、

「²⁶その六月めに、御使がブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。²⁷この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。²⁸御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』」

なんとこの天使の言葉というものは、もう暖かさといいまかね、祝福、愛、それに満ち満ちています。「めでたし恵まれる者よ」と。「ベアトリーチェ」というのはそうなんです。「ベアトリス、ベアトリーチェ」「恵まるる者」という。

「めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり。ずっと主があなたと一緒にいらつしやる。見えざる主さまがあなたと一緒にいてくださるんですよ」

²⁹マリヤこの言によりて心いたく騒ぎ、斯かる挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、

マリヤのほうは全く気がつかなかった。突然こういう言葉が臨んできた。そうしましたら、
³⁰御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。』



天使の言葉はいつも「懼るな」という。

「こわがる必要はない。おどおどする必要はない。力ある平安があなたを被^{おお}うから」と。上からこの力が臨んできて、そしてその光輪が包むように、その人の全存在を神さまの御力が包んでしまう。そこに神さまの護りの膜ができます。そうすると、悪しき者は手を出すことができない。

インドのサンダー・シングがそうだった。天使たちがずうつと軍勢をなしてサンダー・シングを護った。土人たちに襲われようとした時に——夜です——光がまばゆくて、攻め込んで来れなかったと云う。そのことを後からサンダー・シングは聞かされて驚いたという。本人は何も知らない。けれども、その周りにずっとこの光の天使たちが護っていた。だから、攻め込めなかったという。

小池先生も今から10年くらい前の夏の特別集会の時に戸外に出て——先生はいつも忘れっぽいですから、長袖のシャツを忘れて——いたので、私は先生に「蚊にさされますよ」と言ったら、

「いやいや、聖霊の膜が被^{おお}っているから、蚊はさせないよ」

と、そう本気で言っておられた。膜に被われていると。それからまた、

「私は風邪を引かない。聖霊に被われているから風邪は引かない」

とも。ちゃんと膜が被っているんですね。そのくらいリアルなんです。決して形容詞でもなければ、思い込みでもない。事実なんです。それが神さまの世界です。だから、無理やりに力んで、「こわくない、こわくない」と言い聞かせるのではなく、

「恐れのない世界に入れてあげる。あなたは神さまに恵みを受けるよ」

ということですよ。

● イエスの名

31 視よ、なんじ孕^{みじも}りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。

「イエス」という名は、

「ヤーヴェーは我が救い、神さまは私の救い、ヤーヴェー救い給う」

という内実をもった名前です。「ヤーヴェー」というのは、小池先生がいつも仰います。「エホバ」と我々の聖書に書いてあります。「ヤーヴェー」というのは、「実存者」ということ。「エホバ」というのは、「ヤーヴェー」という名前を呼ぶのは恐れ多いというので、これを「主」と呼んだ。「主」は「アドナイ」——これは「わが主」です——それに母音か子音の組み合わせで、「エホバ」と呼ばれるようになった。ですから、「エホバ」という名前は「実存者」という「有りて在る者」、「私は在る」と仰るお方、それから「わが主」ということ。この「主」という面と、それから永遠にいます「有りて在り給う」お方という、その二つが一緒になった名前だから、小池先生は「エホバ」というのは、「実存主」と捉えておられます。



実存というのは実存哲学なんかで云われておりますけれども、実はその「自分を投げ出す」という姿がある。自分を投げ出しているという姿。それからもうひとつは、ヤーヴェーの聖名は「我は有りて在る者」、即ち永遠にある。他のものは有りましてまた消えていく在り方ですね。ところが、消えない永遠の在り方、それが「有りて在る者」。しかも小池先生はそれを唯、在るんじゃない、他者を在らしめる在り方、在るということが即、人を命づける。人を命づけるということは自分を与えるということ。生命のある神さまがその生命を分与して与えて、そして人を生かすという在り方。

それは「自分を投げ出す」ことにおいて、実現されますから、高い所に鎮座ましましておったんではだめなんです。自分を投げ出して、イスラエルの民が苦しんでいた時に神さまは降ってきて、イスラエルの民を捉えて助け出すという、そういう自分を投げ出していく、そして命を与えていくという在り方。それがまた、「主」ですから、素晴らしい名前なんです。ですから、この「イエス」というのは、このエホバ、ヤーヴェーの神さまは私の救いだ、「エホバは救い給う」という名前です。エホバの神さま自身がそういう質、本質なんです。有らしめて在る、命づけて在るといって、それを具体的にこの地上に成就するお方、そういう意味あいがこの「イエス」というお名前にこめられています。正にヤーヴェーの神さまの出店、その具体ということ。す。

● 聖霊の来臨

32 彼はおおおい大ならん、至高者いとたかきものの子と称えられん。また主たる神、これに其の父くらいビデの座位をあたえ給えば、33 ヤコブの家を永遠とこしえに治めん。その国は終ることなかるべし』34 マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35 御使みつかいこたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者ちからの能力ちからなんじを被わん。

そういうふうな膜を張って、中に聖霊が内住し、そして周りを被われる。内住し、かつ外側から包むという、そういう在り方で聖霊があなたに臨まれるという。

此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36 視よ、なんじの親族エリサベツも、年老いたれど、男子はらを孕めり。石女うますめといわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言ことばには能わぬ所なし』

いったいマリヤさんがどのような生み方をなさったのか、どのようにしてそのイエスがマリヤさんの中に宿つたのか、そんなことは誰にもわからない。処女懐胎を信ずると言つても、信じないと言つても、そんなのはどうにもならない。信じたからどうの、信じないからどうの、そんな事態じゃありません。けれども、ここにはつきりと、聖霊が臨んできたという、その事態が大事です。聖霊がマリヤの中に受肉してきたということ。あとそこにどんなプラスアルファがあろうと、そんなものは問題じゃないですね。とにかく、



聖霊がマリヤの中に臨んできて、そしてそれが動き出した、聖霊によって身籠もったという。だから、聖なるものである。神の言には能わぬところなしと。そのような天使の言葉です。これはもう理屈ではさっぱりわからないですね。「如何にしてかかるとあるべき」と、人間としては言わざるを得ない。しかし、マリヤはもう疑わなかった。ここまではつきりと上からの圧倒的な力が臨んできた。それに対してわかるのわからないのではない。

「主よ、ただ御意を成し給え。これはただ事ではありません」

と。実はマリヤはこの時既に十字架ですね。この時すでに己に死んで神さまに生きてます。そうでなければ、こんな言葉は受けとれないですよ。まだ許婚の身で全然ヨセフを知らない。なのに突然上からの力で身籠もるといふんですから。ヨセフは密かに離縁しようとした。自分と関係のない人のお腹が腫れていくんですから。これは人間的に言えば、姦通でしょ。許婚の人ではない別の人とかかわりをもったというふうに言うほかしようがない。だから、ひそかに離縁しようとした。ところが、そのヨセフにまた御言が臨んできた。

「離縁してはならない。彼女を妻として受け入れなさい。彼女は聖なる力によつて身籠もっている」(マタイ1・20)

人の思いを超えたドラマが展開しています。マリヤは本当にこれで十字架ですね。一方では、神さまの圧倒的な恵みは嬉しい。数ある女性の中で他ならぬこのマリヤが選ばれた。神さまのドラマの中に巻き込まれた。すごいことが起ころうとしている。

「めでたし、恵まれたたる女よ」

と。大変な祝福が臨んでいます。一方では嬉しい。しかし他方では、自分は普通の女でありたかった。普通の女の人の普通の幸福の中に生きたいという思いがきつとあつたと思います。ですから、このマリヤはもうここで自分を投げ出しました。

38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』
ついに御使はなれ去りぬ。

「神さまが私の主であつて、私はその僕、婢女にすぎません。どうかあなたの御言が成つてください。御言どおり実現してください。私の思いではありません」と、そう言つて自分を投げ出しました。御使は離れ去りました。

●マリヤとエリザベツ

マリヤは急いでエリザベツを訪ねました。エリザベツはマリヤの挨拶を聞きますと、既に六か月になっていますお腹の中のヨハネが胎内で躍つたという。エリザベツはたちまち聖霊に満たされて、神さまに対する祝福を、讃美をとなえます。

41 エリサベツその挨拶を聞くや、兒は胎内にて躍れり。エリサベツ聖霊にて満され、42 声高らかに呼わりて言う『おんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の実もまた祝福せられたり。43 わが主の母われに来る、われ何によりてか



之を得し。44視よ、なんじの挨拶の声、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びおどれり。45信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給うことは必ず成就すべければなり』

このエリザベツの祝福の声に、マリヤはずいぶん慰められ励まされました。だから、今度はマリヤが聖靈に満たされて、

46マリヤ言う、『わがこころ主をあがめ、47わが靈はわが救主なる神を喜びまつる。48その婢女の卑しきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世の人われを幸福とせん。49全能者われに大なる事を為したまえばなり。』

「いったい私は何者だというのでしょうか。この名もなき、家柄も血筋も何もない、普通の乙女である私を神さまがつかまえ、御業を成さんとしてくださったとは」

と。今、エリザベツの祝福によつてマリヤは魂が躍りました。だから、

「全存在は主を崇めます。私の靈は救主なる神さまを喜んでいます」と。

48……視よ、今よりのち万世の人われを幸福とせん。49全能者われに大なる事を為したまえばなり。その御名は聖なり、50そのあわれみは代々かしこみ恐るる者に臨むなり。

神さまの憐憫はかしかみ畏れる者、己を投げ出している者、自分を何者ともしてない者、その前に平伏している者、そういう魂に神さまの憐憫は臨んできます。

51神は御腕にて権力をあらわし、心の念に高ぶる者を散し、

そうなんです。神さまにいちばん罪深い姿は、高ぶる姿です。神さまに対して高ぶっている姿です。神さまを神さまとしてない姿、これがいちばんいけない。

52権勢ある者を座位より下し、いやしき者を高うし、53飢えたる者を善き物に

飽かせ、富める者を空しく去らせ給う。54また我らの先祖に告げ給いし如く、

55アブラハムとその裔とに対するあわれみを永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助けたまへり』

このお告げを受けたという事態が既にイスラエルの救いとなつている。そういうふうを受けとつている。そして、三か月ばかりエリザベツの所に滞在した。この三か月というのは本当にきつとエリザベツと二人しての讚美の三か月だったと思います。そしてやがてエリザベツは男の子を生みました。それがバプテスマのヨハネ、イエスの先駆者となりました。

●イエスの誕生と羊飼

それからこの2章になるわけですね。ベツヘレムにお生まれになった。それはたまたま戸籍登録があつたために、ヨセフもマリヤと一緒にガリラヤの町ナザレを出て、南のユダヤへと上つてきた。そしてダビデの町ベツヘレムという所に宿りました。ところが、月が満ちて初子を産んだ。



7 初子をうみ、之を布に包みて馬槽に臥させたり。旅舎におる処なかりし故なり。

ナザレにずっといらつしやったら、イエスももう少しまともな誕生をなさったでしょうね、自分の家で。ところが旅先でありました。旅先で月が満ちてしまつた。そして旅舎は全部満員である。仕方なしに馬小屋に宿をとつて、その馬槽の中に、飼葉桶の中に生まれた。いまでこそ、クリスマスカードなんかにかい飼葉桶の中に寝ている幼児を描いて、その横にロバなんかいてね、そしてニコニコとしている非常にロマンチックですけど、現実問題はそんなもんじゃない。それでしょ。馬小屋でお産をしなければならぬというのは大変なことです。だから、イエスは生まれがどん底です。ところがその時に、

8 この地に野宿して、夜群を守りおる牧者ありしが、9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。

イエスの誕生を一番先に告げ知らせられたのは、羊飼いであつた。ヘロデ王でもなかつたし、博士たちでもなかつたし、律法学者たちでもなかつた。この名もなき羊飼いたちに主の使が現れてきたという。この一事をみても我々はすいぶん慰められるではありませんか。今でいうなら、総理大臣でもない、大会社の社長でもない。それこそ人が眠っている間、なお羊の番をして働いているそういった貧しい人たち。おそらく、こころ素直な正直な人たち、日頃は顧みられないような人たち、そういう人たちの所に一番先に天の使が、主の使が下りてきたという実に素晴らしい場面です。さきほど讚美歌で歌いましたでしょ、15番

1. ああベツレヘムよ などかひとり
星のみ匂いて ふかく眠る。

星だけがキラキラ輝いている、その夜、人は静かに眠っている。

知らずや、今宵 くらき空に

とこよのひかりの 照りわたるを。

2. ひとみな眠りて しらぬまにぞ

み子なるキリスト 生れたもう。

あしたの星よ うたいまつれ

「神にはみ栄え 地には平和」と。

3. しずかに夜露の くだるごとく

めぐみの賜物 たまもの 世にのぞみぬ。

罪ふかき世に かかるめぐみ

天より来べしと たれかは知る。

皆さん、夜露の下るのを見た人はありませんね。夜露は知らずして下っています。朝起きたら、草の葉の上から夜露がキラキラ輝いているという、人知れず下る夜露、そのように神さまからの贈り物であつたイエス。これは誰も知らないところで、あの馬槽にお生



まれになって、その喜びを知らせようとして、神さまが送り給うた天使が現れてきたのは羊飼いであったということです。

9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、いた甚くおそ懼る。

光輝いたんですね、その一帯がずつと。
今から5年前に私の家の三階でそういう光輝いたのを梅村君が見たんですね。「わあ、凄い光が輝いてきた！」と言っている。僕は何もわからないですよ。だから、この時の栄光というのは、もつと具体的に羊飼いに見えたんでしょね。主の使がはつきりと傍に立った。特に彼らは何も霊的な人たちでも何でもなかったのに。

● 懼るな

こういう異象に出逢いましたので、羊飼いは大変懼れました。マリヤさんも懼れました。その時に御使の言葉は、「懼るな」と。神さまから臨んでくる言葉はいつも「懼るな」ですね。思いがけない時に、思いがけないものが頭れてくる。しかも、それがあまりにも神秘に満ちている。神々しすぎる。だから、そういうものに触れると、喜ぶ前に懼れちゃうわけですね。本能的に私たちは自分の醜さ、自分のはかなさ、自分の不安定さ、そういうものを直観して、そして懼れるわけです。それに対して神さまのほうは、

「懼るな、懼れなき世界に入れてあげるよ」

と。別な言葉で言えば、

「心安かれ、安心せよ、平安汝にあれ」

という御言です。キリストがガリラヤ湖の水の上をずつと夜中に歩いて来られたあの時だつて、弟子たちはいたく懼れた。幽霊だと言つて懼れた。その時に、

「我なり、懼るな。心安かれ」(マタイ14・27、マルコ6・50、ヨハネ6・20)

と仰つた。

10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民一般に及ぶべき、おお大なるよろこび歡喜のおとずれ音信を我なんじらに告ぐ。11 今日ダビデの町にて汝らの為すくいぬしに救主よめうまれ給えり、うまふねこれ主キリストなり。12 なんじら布にて包まれ、馬槽うまぶねに臥しおる嬰兒みどりごを見ん、これしるし是の徴なり』

私はこの言の中で「懼るな」という言葉と、それから「大いなる歡喜の音信」というこの二つ、皆さんに注目していただきたいと思えます。考えてみたら、我々の人生は懼れの連続かもしれない。ちよつと子どもさんが熱を出すと、どうですか。本当に親たる経験のある人はみな——後で過ぎてしまえば何だということだけ——これから何が起こってくるかわからないという時に、やつぱりまず来るのは懼れです。何か背筋がぞくつとするようなそんな思いがあり、その時神さまは、

「懼れるな。私がついているよ、大丈夫だよ」



と。私たちの心から、そういう懼れ、不安、何が起こるかわからないという不気味さ、そんなものを取り除いて、

「大丈夫だよ、私だよ」

と、これが非常に有り難いですね。

●大歓喜の音信

それから、このクリスマスの音信は「大歓喜の音信」、大いなる喜びの音信という。神さまは喜びをもたらしてくださった。イエスが生まれたということが、もう何よりも凄い喜びなんです。これがどんなに凄いことかということが、その時はわからないけれども、だんだんとわかっていく。

11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主^{すくいぬし}うまれ給えり、これ主キリストなり。

馬槽に臥しているあの嬰兒^{みどりご}、布に包まれている嬰兒、これがその大いなる歓喜の徴、救主の徴だよ。

13 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、

天使が言うだけのことを言った。それで堰^{せき}を切ったように今度は、大合唱が天上で起こりました。神さまの世界というのは、ちゃんと語るべきことはちゃんとお告げになって、それから讚美が沸き上がってくるんです。ただ讚美だけが沸き上がってたんでは、我々は何のことかわからない。それに対してはつきりと、やっぱり我々の福音の世界は言葉というものが臨んでいますね、霊言が。霊言は即ちそこに生命^{いのち}があります。

「わが言は^{ことば}霊なり、生命^{いのち}なり」

です。だから、その霊言をしかと受けとつた者は、そこで変えられちゃいます。そういう力ある言葉、それが臨んでいる。またこれは約束の霊言でもあります。アブラハムがそうでしたね。約束を受けました。モーセも約束を受けました。約束であり、それからまた使命を与える命令でもあります。

「やあ、動け、動き出せー!」

と。力を与えて動き出させる。そういうものでもあります。私たちは何となく感じて動いたりするんじゃない。聖書の世界を見ますと、はつきりと御言が臨んできて、その御言に自分を委ねている。マリヤもそうでしたでしょ。

「私は主の婢女^{はしため}です。御言^{みことば}通り^{みことば}にしてください」

と。向こうから絶大なる霊言が臨む。それに対してもう自分を預けちゃっている。そういうところに神さまの御業^{みわざ}が展開していくんですね、すごく。そして、讚美の合唱が起こってくる。天上が実に輝いているわけです。

13 忽ち^{たちま}あまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き

処には栄光、神にあれ。地には平和、主の悦び給う人にあれ』



と、「あれ」というのは余韻なんです。いと高い処に神さまの栄光があらわれた。地に住める人には神の平安が臨んだ、という断定なんです。

「いよいよ、それがそうでありますように。末永くそうでありますように」

という、その響きはあと続いていきます、余韻となつて。でも先ずは、この大合唱は、いと高き処に神の栄光が今あらわれた。地には神の喜び給う人の上に平安が臨んだ——羊飼いです——羊飼いの上に、またヨセフ、マリヤの上に平安が臨んだと。そういうことですね。だから、この羊飼いたちはすっかり嬉しくなつて御使の示したとおり、ベツレヘムを訪ねて行きました。そして、この嬰兒に出逢いました。そしてマリヤとヨセフに、

「実はかくかくしかじかのがあつて、私たちはやつて来たんです」

と。マリヤは不思議だなあと思つて、ずっと心に留めて思い巡らしていた。羊飼いたちは御使のお語りになつた通りだということを知つて、感謝に溢れ喜びに満たされて、また羊の所へと帰つて行きました。

● 神の御業

このクリスマス夜のこんな出来事があつたということは、何と慰め深いでしょうかね。世の中はきらびやかなこと、華やかなこと、そういうものもてはやされている時代でしょう。ところが、神さまの御業というものは、こんな名もない人のところへ、誰にも隠されて、少数の選ばれた人だけに啓示がきて、そして展開されていく。全然、今の何と言いましようかね、マスコミュニケーションの宣伝の時代とは全く逆ですね。神さまの啓示というのは、こんなかたちで顕れてくる。隠されつつ、顕されているんですね。私たちキリスト者がこの地上に置かれてきているのも、同じようなもんじゃありませんか。我々選ばれた者は、何か取柄があつて選ばれたんじゃない。皆、名もなき貧しき人たちが、行き詰まった人たちが、あるいは何処かで人生挫折してどうにもならなくなつて、そして助けを求めた人たち。そういう正にパウロがコリント書簡で言つてますように、

「26 兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる**智き者**をおおからず、**能力**ある

者をおおからず、**貴きもの**多からず。27 されど神は**智き者**を辱しめんとて世の**愚なる者**を選び、**強き者**を辱しめんとて**弱き者**を選び、28 有る者を亡さんと

て世の卑しきもの、軽ぜらるる者、すなわち**無きが如き者**を選び給えり。」(コ

リント前1・26〜28)

「**能力**ある者多からず、**智慧**ある者多からず、**智き者**多からず、**無きが如き者**を神さまは**選び**給えり」

と。全く無き者であるが故に神さまは**選び**給うたという。いと小さき者、見栄えのしない者、無者を神さまは選んで、それを**無限無量者**へと展開してくださる。これが福音です。

それは誇らない為です。誇りがあるところには神さまの御業は妨げられるんです。我意



の立っているところには神さまは働けない。先ずはこの我意をぶっこわさないと、神さまは仕事できない。それにはやっぱりちよつと、どこか抜けて、あるいは、行き詰まってアップアップしてるのを捉まえるのが一番やり易い。神さまは仕事し易いわけです。

まあ例外はパウロでしたね。あれはものすごい優秀で、自信が強くて、なかなか我意が有り過ぎて困る。しかし、つぶれるのを待っていたんでは時間がかかる。だから、光でもって顕れて、ぶっ倒して、パウロはもう大手術を受けました。神さまに殴り込みやられた。時は迫っていたからです。余りにもキリスト教徒に対する迫害が強すぎたから、その急先鋒がパウロでした。だから、キリストはもうたまらなくなつて、ダマスコ途上で現れた。

「パウロ、パウロ、何ぞ我を迫害するか！」(使徒行伝9・4)

と。パウロはぶっ倒されて、目も見えず、口もきけず、三日間飲み食いしなかったと書いてます。それですっかり砕かれ、神さまの僕になりました。神さまのなさり方はさまざまです。

だけでも、やっぱり人それぞれですから、そんな大手術されたら、もうぶっこわれて永久に立ち上がれない人もいるだろうしね。春雨はるさめの如くシトシトとしみ込んでいって、造り変えてくださる御業もあるし、パウロさんみたいな引っくり返り方もあるし、これはさまざまですから、あんまり現象で比較なさらないでください。私なんか、どつちかというところ、春雨型かもしれない。梅村先生はパウロさん型ですね。ガラリと変わるそういう変わり方、まあいろいろですけども。

とにかく、神さまが御業をなさる時は、まず人間の側がいつペン否定されないといけません。これだけははつきりしてます。あのエリザベツの旦那さんであったザカリヤが啞おしにされてしまった。「お前は口が邪魔になる、ベラベラつまらんことを喋りすぎる、暫く黙っておれ！」と、おしにされた。そんなふうにいるんなことをなさいます。マリヤさんも本当に柔らかき魂でしたから、御使のお告げをそのまま受けとった。

●シメオン

それから今度は、イエスさまのことが出てきます。イエスの誕生がそうでした。イエスの誕生のことをもうちよつと見ますと、人がみな寝しずまった時に——さきほどの讚美歌のように寝静まった夜です——馬槽にイエスがお生まれになった。御使が現れて、羊飼いたちにこの喜びの音信おとすれを告げた。天に大合唱が起こった。天は輝いたわけです。その輝きは今、馬槽にお生まれになったこのイエスから発している光が、天上に投射されているよな、そういう光。このような天使たちの大合唱に護られて主はお生まれになった。

主から光が天に届いていった。だけど、世の人は誰も知らない。そしてこの嬰兒がお生まれになって、八日目にイエスと名付けられました。それから更に潔めの日というのは40日なんです。40日の潔めの日が終わりましたから、今でいうなら、宮参りということなんです。



幼児は携えられてエルサレムに宮参りに上つて来ました。ところが、このエルサレムに一人のシメオンという老人がいました。この人も非常に変わった人ですね。祈り深く、イスラエルが贖われるようにということをはたすら祈り待っていた。

25 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔けいけんにして、イスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在います。26 また聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたれしが、27 此このとき御霊に感じて宮に入る。

このように神さまに用いられている人はみな直接、聖霊が働いておられます。人がどうこうじゃない。聖霊がシメオンの上にあつた。だから、聖霊によって

「お前はこのキリストに出会うまでは絶対に死なない。キリストを見て、ある役割を果して、それからお前は世を去るんだ」

と、そのことを言われていた。そういう人ですから、ずっと祈り心でいますと、

「時が満ちた。今だよ、さあ今、行きなさい！」

と、そういう聖霊の迫りによって、彼は宮に出てきた。そこでイエスにばつたり会うわけです。

この人生の大事な瞬間、小池先生がいつも仰いますね、

「人生には大事な瞬間がある」

と。それをしっかりシメオンはつかんだわけです、つかまされたわけです。ちょうど両親がイエスを携えて宮参りにやつて来ました。そこでシメオンはためらわず近づいて行つて、

28 シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、29 『主よ、今こそ御言みことばに循したがいて、僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。30 わが目は、はや主の救すくいを見たり。

「イエスを取りいただき、神を讃めたたえて言いました。「主さま、今こそ御言通りに私をお召しになってください。天にお召しになってください。はつきりと主の救いをこの目で確かめました。私が地上に今まで置かれてきた役割はこれで終りました。余生の最後のこの使命というのは、この主を見るということでした。それをはつきりと私は果たしました。だから、もうこれで御許に生かしてください」と。主キリストの証言者、さきほどの羊飼いとそれからこのシメオンです。

31 是もろもろの民の前に備え給いし者、32 異邦人をてらす光、御民イスラエルの栄光なり』33 かく幼児おのひなに就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、34 シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児おのひなは、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。35 —— 剣やいばなんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念おもひの顕れん為なり』

この救主キリストは生まれながらに十字架を背負つて世に送り出されてこられた。



●永遠の生命

イエスは、

「イスラエル人の或いは倒れ、或いは起たん為に」

まさに躓きの石、妨げの岩となられた。この岩はそれにすがる者にとっては救いの抛りどころ、救いの岩。しかし、それに逆らう者にとっては躓きの石。自らを審く、そういう審きの石です。この他に救いがないんですね、人にとっては。何を捜しても、何処を求めても、この他に救いがない。その最後の救いの切り札を踏みにじっていたら、それは自分自身を地獄に定めることになる。石にぶつかって自分が粉々に碎かれる。この救いの前に平伏す魂は無条件に救われる。そういう人類を二分する分水嶺のような、そういう役割をこの幼児は果たしているというわけですね。

それは人の思いがそういう形であらわれてくる。本物が出てこなければ、わからないです。本物にぶつかつた時に、人の姿というのは露あらかわになつて顕れてくる。主の前に平伏す魂か、それともそれに背を向ける、あるいは刃向かう、反逆する魂か。これはどうしようもない。実は多くの人は反逆しました。あの十字架を思ってください。誰一人、イエスをかばおうとしなかつた。弟子ですら逃げてしまつた。ただ少数の女たちだけがじつとイエスを見守つた。そういう孤独な死を遂げられます。それはマリヤさんにとっては、正に十字架です。剣で胸を刺し貫かれる思いであります。

「何がゆえに、私の息子はこのような苛酷な定めを背負わなければならないのか。普通の人として生まれて欲しかつた。少なくとも私が息子に見守られて天に召されたかつた。ところが、その息子が無惨な死に方をする。それをじつと見届けなければならぬ」

これはお母さん自身はもう十字架です。そのことをはつきりとここで預言されてしまつた。

「言い逆らひの徴」

と、先週の日曜にも申しました。

「愛が受けとられないほど大きな悲しみはない」

ということを私は言いました。せっかく、良きものを携えて、神さまの満ち満ちた恵みを携えて、その国へやって来たのに、皆それを拒絶して、踏みにじつて、愚弄し、鞭打ち、唾し、そして殺してしまつた。何たる悲しみかというわけです。しかしこのキリストの愛の生命はそんなものでは屈しなかつた。墓を蹴破つて、反逆の彼らの為に祈り給うた。

「父よ、彼らを赦し給え。このままでは彼らは滅びです。私は彼らをも救いた

い。どうぞ、彼らを赦してやってください」

その祈りは今も叫ばれています。絶対へこたれない。現象的にはイエスは滅びた。十字架で命は奪われた。しかし、この十字架の上からの祈り、死を越えて貫かれた祈り、これ



は今もなお生きています。イエスは霊体となって墓を蹴破って世に現れた。そして弟子たちを助けられました。この生命は死なない生命なんです。このクリスマスを通してもたらされた、この地上に宿った、このイエスという生命、これはもはや何をもってしても滅ぼすことのできない生命、これぞ永遠の生命です。絶望ということを知らない生命なんです。

「肉体を滅ぼしても、滅ぼし得ぬものが私の中にきている。私は自ら命を捨てる。それは永遠の生命を得んがため、そして永遠の生命を与えんがため。これが父の御意だ。誰かが私から奪うんじゃない。私は自ら捨てるんだよ」

と。ですからさきほど、ヤーヴェーの神さま自身が自分を投げ出して、地上に投げ出して、そのどん底に降って人を活かすという、活かす神さまだということを行いました。その具体者、具現として、地上に幕屋を張ったのが実にイエスでした。

●この人を視よ

そういう欲求がずっとあります。それを捜して求めていたんですね。そしてある時、本当にこの方に出逢った。私たちは正直言つて、神さまと云われたってわからないです。神さまとはこんな方だ、神さまは愛だ、神さまは永遠だと。そんなこと云われたって、頭ではわかってても、魂で実感ではわからない。ところが、このイエスというひとりの人、ナザレのイエスとして生まれ、あのように生き、あのように死に、復活され、今も生きてい給う、そういうひとりの霊的人格——具体です、正に具体です、体を具えた方——そういうお方に出逢ったんですね。ヤーヴェーの神さまは「偶像を刻んではいかん」と仰った。神さまは見えない神さまだ、霊なる神さまだと。だから、それを何か見える形のものに固定化してはいけない。

「神は霊なれば拝する者も霊と真をもって拝せよ」(ヨハネ4・24)

と。捉えどころがないんですね。捉えどころのない神さまが、このような捉えどころのない形で、正に我々と同じ姿となつて、我々と言葉を語り合い、我々に手を差し伸べてくださり、我々を抱いてくださり、一緒に泣いてくださる。そういう方として地上に来てくださった。現実に来てくださったということですよ。

福音書のイエスに出逢っている。我々に出逢います。福音書のイエスの言を今、私たちに語られた言として受けとります。これは本当に大きな恵みです。我々は、神さまとはどんな方かなんて尋ねる必要はない。このイエスを視よと。この方こそが我々の神さまだ。我々に顕れてくださった神さまだと。121番の讚美歌にありますね。

1. 馬槽まぶちねのなかに うぶごえあげ

木工たくみの家に ひととなりて

貧しきうれい 生くるなやみ

つぶさになめし この人を見よ。



2. 食するひまも うちわすれて
しいたげられし ひとをたずね
友なきものの 友となりて
こころくだきし この人を見よ。
3. すべてのものを あたえしすえ
死のほかにも むくいられで
十字架のうえに あげられつつ
敵をゆるしし この人を見よ。
4. この人を見よ この人にぞ
こよなき愛は あらわれたる
この人を見よ この人こそ
人となりたる 活ける神なれ。

「この人こそ、人となりたる活ける神さまなり」と、これは私の実感ですね。

「よくぞ、主さま、この地上に来てくださいました。私はあなたに出逢ったことで
本心に心は満ち足りています」

と。シメオン爺さんはあなたに出逢って喜んで天に召されていった。シメオン爺さんはみどりこ嬰兒
だけを見ました。私たちは全キリストを見たんです。嬰兒なるキリスト、それから成人さ
れた主さま、伝道のお姿、十字架のお姿、それから復活して弟子たちに顕れた姿、天上に
あつて今もなお聖霊を送って導いておられるそのキリスト。そういう素晴らしいキリスト
に私たちは出逢いました。出逢っていただいた。

「我なり。懼るな、心安かれ」

と。いつも来てくださる。こんな方に出逢って、私たちの人生はそれだけで足りるんです。
そのほか何を望むことがありますか。究極のものに出逢ってしまった。後はその究極
のものが今度は、私たち一人ひとりの中に宿ることです。私たち一人ひとりが馬槽、正に
藁しか持つてない、そういう所にイエスという宝が我々一人ひとりの中に宿るんです。御
霊という宝が宿る。そして、

「いつもお前と一緒だよ。私がお前の中で業をわざ展開する。目を見張って見ておれよ。

どんな素晴らしいことをこれからしていくか見ていなさい」
と。「いつも一緒だよ」と言って働いてくださる。そういう主さまですね。

「罪のことなんか心配いらん。お前の弱さも駄目さかげんも、そんなことはもう一
切問題なし。そんなものは全部もう片づけた。さあ、これから本当の私の業が展

開するよ」

と、これが福音です。だから、クリスマスは十字架に通じ、十字架から復活に通じ、そし
て今、我々の中に内住しておられるキリスト、御霊のキリスト、それ全部がクリスマスな



んです。

これはもうどんな嵐も消すことができな火です。どんな嵐にも光輝いている灯台、海を往く船の道標みちしるべをしております灯台の光、それよりもっと素晴らしく我々自身の中に光となつて宿る。そしてまた、人生の航路で行き悩んでいる人たちを照らす。今度は、我々が灯台の役目をするんです。我々が救われて、それで「めでたし、めでたし」では絶対になり。今度は我々自身が人の魂を照らす灯台の、また灯台守の役割を果たささせていただきます。そしてやがて、あの天の軍勢のようになって、我々の讚美が天上に響きわたる。そんなことを私は夢見ています。小さいところから始めて、それが大きな輪になつてゆきます。それは全部、神さまの御業みわざですから。

● 個を活かす光

ヨハネ伝の1章を見ていただきます。9節。

「9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。」

「私はもろもろの人を照らす光であると共に、もろもろの人を活かす真の光。もろ

もろの人を活かす真の生命ありて世にきたれり」

と。4節に、

「4之に生命あり、この生命は人の光なりき。」

とあります。だから、この生命と光は相即しております。自然界の太陽は存在していることが即、我々地球上の生きとし生けるものを生かしめ、照らし、生命づけてくれておりますように、この生命、この光は人を活かす光であり、照らす光であり、導く光であります。この光を、この生命を受けとつた者は永遠に死なない。永遠に暗き中に歩まない。14節、

「14言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり」

永遠の御言、霊なる言キリストは、肉体となつて私たちの中に宿ってくださいました。幕屋を張つて、テントを張つてくださった。この召団の中にキリストが宿ってくださいました。召団をテントとしてその柱となつて主が宿ってくださいました。

この召団の中にキリストの霊気が満ち満ちている。そして、それは一人ひとりなんです。皆さん一人ひとりなんです。召団という群れであると共に、皆さん一人ひとりなんです。キリストの世界は、何よりも個ですよ。「あの人、この人」という前に、まずあなた自身なんです。ルカ伝に書いていますね。

「7……罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の

正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。」(ルカ

15・7)

と。そうなんです。人を救おうという神さまの本願が貫かれますと、そしてその人が救われますと、ちょうど、キリストがお誕生になつたような大合唱が天において讚美が献げら



と。これがイエスさまの御思いですよ。その内実は、

「14……父の独子の栄光にして、**恩恵と真理**とにて満てり」（ヨハネ1・14）

と。恩恵はまた愛ですね。真理は生命といってもいいです。愛の生命に満ちていた。

小池先生は、

「**真（誠）**（まこと）というのは必ず実現するもの」

と言われた。冷たい真理ではない。必ず実現してくる何ものかです。

「17律法はモーセによりて与えられ、**恩恵と真理**とはイエス・キリストにより

て来れるなり。18未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡にいます**独子の神のみ**

之を顕し給えり。」（ヨハネ1・17、18）

福音書に展開されました、全イエス、全キリスト、それを私たちは今日、我々一人ひとりという存在の中に、我々一人ひとりを馬槽として、その中にこの永遠の生命、御霊の生命、御霊なるキリストをしっかりと受けたいです。これは無条件なんです。罪深き世に人知れず降り給うたキリストです、私たちの罪を全部、十字架でもう片付けて。

「**懼れるな**。懼れなき世界に私は入れてやるよ。今からのち、私はいつもお前たち

と一緒にだ。いつもお前の永遠の光だ、安心しなさい」

と。どんなにこの地上が不安定でも、どんなにいわゆるこの世の中では、人と人との間柄というのは、相対的なもので、不安定で、なかなか永續しない。いさかいもある。躓きもある。波の如き世の中です。そんな中であって、このキリストというお方は、この貫きは、**真理は永遠**ですよ。我々を絶対に捨て給わない。

私たちは絶対の信頼をこの方において、その方の中で生きていくことができます。だから、この方に出逢ったら、我々はもうメソメソはしてられないですね。弘野さんがいつか書いてくださったように、

「キリストは大希望です。キリストは希望です。永遠の希望です。悲しんでいる人があつたら、私のところへ言ってきたください」

と、こういうふう弘野さんは言ってきたですね。大言壮語じゃないんです。主の御力はそんなふう絶大です。

● 十字架と門

そういう私たちが主を受けとる鍵はこれですから。どうしたら主さまを受けとることができますか。それは主さまの十字架の前にごまでも平伏することです。このキリストの十字架の中へと帰り行くことです。祈りいくことです。我々が前進するということは、限りなく主キリストのこの十字架、

「われ汝を贖えり」（イザヤ43・1）

と。このキリストの中へと我々は祈り入っていくことです。そこから我々は立ち上がって



いくことができる。だから、我々の祈りの中で、この主の十字架を深く受けとること、ここでもはや相対的な我というものは全部片付けられて、贖いとられて、

「復活の主、聖霊の主が新しくお前の中で生きるぞ。私自身をお前に与えたぞ」

「はい、主よ、ありがとうございます。いよいよそうであつてください。主よ、^{みこころ}御意〇が成りますように」

と。あのマリヤのお応え、

「主さま、私はあなたの婢女です。御意をどうぞ成してください」（ルカ

1・38）

この圧倒的な恩恵の事実はこの身を委ねていただけなんです。無条件に受けとつていくことです。自分を見ない。そういう祈りの中で、

「いよいよこのキリストの光が私たちを貫き、照らし、また内側から発してくださいるように」

そう願います。それでは祈りますが、その前に讚美歌を歌いましょう。217番「あまつましみず流れきて」。

1. あまつましみず ながれきて
あまねく世をぞ うるおせる。

ながくかわきし わがたましいも
くみていのちに かえりけり。

2. あまつましみず 飲むままに
かわきを知らぬ 身となりぬ。

つきぬめぐみは こころのうちに
いずみとなりて 湧きあふる。

3. あまつましみず うけずして
つみに枯れたる ひとくさの

さかえの花は いかで咲くべき
そそげいのちの ましみずを。

それでは、感謝の祈りを献げます。

